

事件
番号

平成 一 四年 (め) 第 八六 号 等

証人尋問 調書 (この調書は、第 二

回公判調書と一体となるものである。)

裁判所
書記官印



氏 名

廣 野 巳 代 子

職 業

仲 居

年 齢

六 二 歳

住 居

石川県鳳至郡能都町宇出津山分
一〇字三

弁 護 人

被告人は、証人の息子さんですね。

そうです。子供は一人だけです。被告人が三歳のとき、父親は死亡

しています。

ご主人が生きていたとき、何か商売をしていたのですか。

能都町の藤波というところに住んでおり、そこで車のタイヤの販売

をしていました。

証人から見て被告人はどういう人物ですか。

真面目で働きものと思っていました。本件事件を起こすとは夢にも思っていませんでした。

警察や検察庁の調書を見ると、被告人は職業をかなり替えているようですが、証人は知っていましたか。

知っていました。

被告人は奥さんと離婚し、奥さんが子供二人を引き取っていることも知っていますか。

知っています。

被告人の結婚生活のとき、経済状態が苦しいということは知っていました。

いいえ、被告人は長距離の運転手をしており、沢山のお金を貰っていたと思います。

生活は苦しくなかったと思います。

被告人の警察での調書によると、被告人はパチスロに二年ほど凝って、それで

経済的に苦しくなつて、奥さんがサラ金からお金を借りるようになったと述べているのですが、そのことは知っていますか。

知りませんでした。

証人からみて、被告人の性格はどうですか。

被告人が短気ということはありませんでした。被告人は、中学、高校時代に友達と喧嘩をしていたということもなく、友達と仲良くやっていたと思います。

証人は、被告人に注意をしたことがありますか。

あります。「人に迷惑をかけてはだめだ。」「人から後ろ指をさされるようなことはしてはいけない。」など言ったことがあります。

それについて、被告人は反抗的な態度をとったことがありましたか。

手を出すようなことはありませんでした。

証人は、被告人に面会に行かれていますね。

はい。今までに一二、三回ほど行っています。金沢に来たら必ず病院と面会に行っています。

被告人は、本件事件について、どのようなことを言っていますか。

「俺が悪い。」「俺が悪い。」と自分が全面的に悪いように言っていて深く反省していました。

本件事件後、証人は被害者が入院している病院に見舞いに行かれていますね。

はい。被害者が入院している県立中央病院へ今までに一二、三回程見舞いに行っています。

見舞いの際には何か持って行っているのですか。

今までに現金一回と果物を二回ほど持って行きましたが、被害者の母親から「帰ってくれ。」と言われ、受け取ってくれませんでしたので、花を買って部屋の外に置いて帰っております。

今日も花を買って置いて来ました。

そうしますと、証人は被害者に会ってお詫びが出来ない状態ですか。

手と膝をついてお詫びをしたのですが被害者の両親から「出ていけ。」

「二度と来ないでくれ。」といわれました。しかし、被告人が悪い

のですから、何回も病院へ行っている次第です。

証人は、本件事件について、被害弁償をする気持ちがありますか。

現在、私は膝が痛くてやっと歩ける状態で一ヵ月に一〇日ないし二

週間しか働くことができないため、弁償するお金がありません。

今のところ、被害者に被害弁償をしようと思ってもできないということですか。

そうです。

検 察 官

被告人は、前の奥さんと二度離婚をしていることを知っていますか。

知っています。

一度離婚して、再び結婚をしたのはどういうわけですか。

最初の離婚のとき、被告人が上の子供を嫁が下の子供をそれぞれ引き取ったのですが、下の子供が「兄ちゃん、兄ちゃん。」と言うのでどうにもならないと言って嫁が入り込んだ形になったのです。

被告人も子供達が可愛そうだということから嫁と一緒に生活をするようになったものです。

それが、どうして離婚をしたのですか。

嫁がサラ金からお金を借りていづらくなったものと思います。

子供二人は嫁が「私が育てます。」と言って連れて行きました。

被告人は、家族に対して暴力を振るったことがありましたか。

ありません。

証人は、被告人から被害者のことについて何か話を聞いたことがありますか。

ありません。本件事件になってから初めて「被害者を好きだ。」というのを聞きました。

裁判官（山田）

証人は、病院で被害者と直接会ったことがあるのですか。

ありません。被害者の両親から「出ていけ。」と言われて部屋に入れてくれませんでした。

以上

表
半
所

156

156

宣^{せん} 誓^{せい} 書^{しょ}

良心^{りようしん}に従^{したが}つて、ほんとうのことを申^{もうし}上げま
す。知^しつてゐることをかくしたり、ないこ
とを申^{もうし}上げたりなど決^{けつ}していたしません。
右^{みぎ}の通^{とお}り誓^{ちか}います。

松野 巴子